

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・1年

氏 名: 村上 幸太郎

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修		
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・カリフォルニア州 サンディエゴ		
研修期間	平成30年6月23日	～	平成30年9月10日
〔研修を通じて得た成果〕			
<p>今回の研修を通して、グローバルな視点・能力として、多様な思考を受け入れ自分の中で昇華するという能力が身についたと感じます。まず、グローバル化していく中で、大切なのは、世界普遍化の中で自分の住んでいる地域に価値を示すということが必要であると考えますが、価値観とは、その人間の背景や、生活によって異なり、日本に住んでいると、同じ言語を用いる民族が大半であり、また、義務教育により知識も均一化されてるため価値観の差異を感じる機会が少ないと思います。研修中は様々な国の方と会話したり、共に時間を過ごす中で、日本では見ることや聞く機会の少ない考え方をする方に遭遇することが少なくありませんでした。この理由として、同じ日本人であれば、常識や普通であればこうあるべきという思考が存在するため、そのような態度で人と接してしまうが、国外であれば、そのような常識をもって接することがなかったためだと思えます。実際は、同じ人間であるので、似た部分のほうが多いのですが、異なる部分にも目を向けるということはストレスを感じてしまうため積極的に行わないことだと思えます。しかし、グローバル化の中で、地域に価値観を付加するためにはこのような差異の部分を見つけ値札を付けることが必要であると感じます。そのためには、自分とは違う多様な思考を見つけ受け入れる必要があり、またその違いを理解する過程が必要だと思えます。そのために、多様な思考を受け入れ自分の中で昇華する能力は、国と国や、人と人、ミクロとマクロの思考の違い、例えば宗教による思考の違いと、家庭環境の違いからくる思考の違いに気づき受け入れることが可能になると考えます。</p> <p>そこで、現地にて“ごみ”をテーマに調査を行いました。このテーマを設定した理由としては、ごみを見ればその人がどのように生活しているのかわかるように、地域によっての違いがわかりやすく出ると考えたからです。調査の結果として、日本と比較し、街にあるごみ箱の数が日本よりも多いが、ごみの分別は燃えるゴミとリサイクルのみでした。この結果から、ごみ箱を多数設置することでポイ捨てしないようにするということと、ごみの分別を二種類にすることで回収の際のコストを下げるといったことが考えられます。この背景として、日本人は規則を遵守する気質があることに比較し、個人主義の強いアメリカでは回収するというところに重きを置いているように感じられました。このようにごみという要素からでもその生活の違いがあるということを知りました。このように日常生活の様々な部分に目を向け気づくことができる能力が身についたと考えます。</p> <p>以上を研修成果の報告といたします。</p>			
〔研修後の抱負〕			
<p>今後の抱負としては、研修前よりも他人との違いを把握していくためには、より多くの人と関わる必要があると考えるため、積極的なコミュニケーションを行っていきます。また、今回得られた日常の小さな部分から生活の違いに気付くという能力を利用して、自分の生活を他人の生活を比較し自分を客観的に評価し、グローバル化していく社会に適応していき、また社会への還元を行えればと思います。</p>			

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・1年

氏 名: 矢田 将之

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修		
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・カリフォルニア州 サンディエゴ		
研修期間	平成30年6月23日	～	平成30年9月10日
〔研修を通じて得た成果〕			
<p>私は、今回の研修を通して、普段の大学生活では絶対に経験することができない、多くの貴重な経験を積むことができました。それによって得たものもとても多かったと感じます。ここでは、今回の研修で得られた、特に大きな成果を3つ紹介します。</p> <p>まず1つ目に、英語力の向上です。研修に参加する前は、読み書きであれば多少はすることができましたが、話す、聞くこととなると全くできない状態でした。しかし、この11週間の研修を経た今となっては、日常会話レベルの英会話であれば、問題なくできるようになりました。これはアメリカで11週間生活するうえで必要だったからというものもありますが、それよりも、失敗を恐れずに会話をするを続けた結果だと思えます。本当に得られたものは、英語力の向上よりも、失敗を恐れられない心なのかもしれません。</p> <p>2つ目に、世界を知ることができたことです。アメリカには多くの国の人が住んでいます。ほとんど日本から出たことのない私にとって、それらの外国人との出会いはどれも新鮮で刺激的なものでした。教科書でしか見たことのない衣装や文化、国民性など多くの違いを感じることができました。それらはどこの国が良いというものではなく、どこも一長一短あるものでした。加えて、世界から見た日本も感じるすることができました。生活では至る所で日本企業の製品を目にしました。エンジニアを志すものとして、世界で活躍している日本企業に誇りを感じるとともに、世界で活躍できる人材になりたいと強く感じました。他にも、多くの場所を旅しました。その場所ごとに、どこにも負けない何かを持っていて、とても楽しむことができました。それと同時に、このようなどこにも負けない何かは鹿児島県にも必要だと感じました。鹿児島県は、歴史的にもとても素晴らしい特性を持ち、気候も大変穏やかで、過ごしやすい場所だと私自身感じています。その特性を生かし、例えばシリコンバレーのような最先端の工業地域を、誘致やベンチャー企業の支援により実現することができれば、鹿児島県も世界から人の集まる活気に満ちた場所になると思いましたし、自分自身もそのような環境で働きたいと思いました。</p> <p>3つ目は、行動力の向上です。日頃から行動力はある方だと自負していたのですが、この海外研修を通して、行動力が飛躍的に向上したと思えます。今回の海外研修も、多くの学生に門戸が開かれているにもかかわらず、ごく一部の学生しか参加しません。周りの人と違うことをすることは勇気がいることです。しかし、今回この研修に飛び込んでみて、本当に多くのことを学ぶことができました。行動力がなければその機会を逃してしまうところでした。これは非常にもったいないことだと思えます。アメリカでの研修中も、時間がある限り、一人で多くの土地を訪れ、多くの人と出会いました。そこでの何気ない会話や経験は、私にとって大きな経験値となっていることは間違いありません。勇気を持って行動し、その結果、このように素晴らしい経験をすることができました。この経験から、また機会があればそれを逃さない、もっと強い行動力を生み出すことにつながると私は確信しています。</p> <p>11週間の研修はとても有意義なものでした。今後もチャレンジを続けていきたいと思えます。</p>			
〔研修後の抱負〕			
<p>今後の抱負としては、1つ目は英語力の向上です。アメリカで再会を約束した人たちを驚かせるため、次にアメリカに行く時までに絶対に英語力を向上させたいと考えています。2つ目は自分が世界で何ができるかを考えることです。世界で活躍している日本人は多くいます。自分の専門分野をより一層学び、その可能性を考え、世界で活躍することができるように頑張りたいと思えます。また、今回の研修で得たことを鹿児島県に還元し、鹿児島県独自の文化を活かしながら、世界の中の鹿児島をアピールできるように頑張りたいです。</p>			

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・1年

氏 名: 白濱 透

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・カリフォルニア州 サンディエゴ
研修期間	平成30年6月23日 ~ 平成30年9月10日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私は三か月の研修で英語の発音特にLとR、TH、CとSHを重点的に発音できるように現地の人との会話から学習を行い会得した。その結果、日常会話(生活、宿泊施設、公共交通機関)での会話が難なく可能になった。地域貢献活動としてアメリカその他の就職事情について調査を行った。日本のいわゆる“新卒”による就活との違いを調査し海外での就活、日本での就活それぞれの特徴を調査し就職を国から選ぶことを視野に入れられるように今回のテーマを決定した。調査方法はインタビューと広告から情報収集を行った。調査成果として、アメリカでの履歴書の様式の違い、面接までの日程や形式、合同企業説明会などの15人のインタビューから情報を集めた。また、他の国、サウジアラビア、韓国、スイス、などの就職事情も調査した。アメリカでは、履歴書に顔写真と年齢は必要なく、日本のように今までの学歴(中学高校)を細かく記載する必要はない。また履歴書の他にカバーレターという自己アピールのための書類を別途送付する。日本のように履歴書に志望動機などを記入する必要はなくあくまで履歴のみとなっている。また、合同企業説明のようなミーティングは存在するが、アメリカでは有料のところも少なくない。また企業に直接面接のアポイントメントを取り付けることも珍しくはない。他の国の例として、韓国を取り上げる。韓国には兵役があるので、兵役参加の時期により就職の流れが左右される。主に、兵役は日本でいうところの高校卒業後もしくは大学卒業後の就職前に二年間参加する。就職の形態としては日本と似ており、企業説明会、エントリー、面接の流れとなっている。韓国人留学生8人にインタビューした中では、韓国では進学先、就職先に両親の意向が強く反映されることもまた多々あり、兵役期間中に就職先を両親がゲットしてくるなど日本では考えられないこともある。また大学卒業後に就職が決まり、兵役に行く際には、二年間の猶予をもらえる制度もある。最後に、企業でのボランティア活動として、日系の新聞会社で三週間の職業体験を行った。海外の出版社の業務を体験し、英語を用いたコミュニケーションで業務を行った。日経の企業ということもあり英語を使うのは会話、翻訳の仕事を含め一日の五割ほどだった。会話では電話対応の際に英語を使い要件を聞き、取り次ぐところまでを行った。翻訳業務ではサンディエゴのおすすめスポットの紹介記事の編集を英語から日本語へ翻訳する業務を行った。ほかにも店頭へのフリーマガジンの陳列も行った。海外での社会活動を三週間行い、英語を用いた環境での職場体験において、電話対応と翻訳についての経験を得た。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>地域貢献活動で得た、海外の就職事情をもとに日本とアメリカその他の国での就職の違いメリット・デメリットを大学内で開かれるプレゼンテーションにおいて発表する。また、英語力のさらなる向上に向けて、鹿児島県内でのコミュニティに参加する。今後就職活動を行う予定であるので海外事業に重点を置く企業への就職へ今回の経験を生かす。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・1年

氏 名: 和田 晃司

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修	
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・カリフォルニア州 サンディエゴ	
研修期間	平成30年6月23日	～ 平成30年9月10日
〔研修を通じて得た成果〕		
<p>今回の海外研修を通じて私が得た成果の一つは、私自身の見聞を広めたことです。例えば、現地に着いてまだ間もない頃、現地の学生との交流や食事などで夜間を出歩くとき、私は毎回少し緊張していました。なぜなら、私は日本の治安が世界で一番良いので夜間に一人で出歩いてもあまり危険はないが海外は日本より治安が悪いので夜間に一人で出歩いたら銃で脅されたり、何か危険な事に巻き込まれると思っていたからです。しかし、海外研修の期間を過ごしている間にそのようなことは起きなく、また、危なそうな場所なども次第に分かってきたので、現地に行く前よりも治安の状況が正確に認識できたと思えました。さらに、現地の人たちとたくさん会話することで、現地の生活や各町ごとの人種の割合やホームレスの人たちがサンディエゴに移り住む背景などを知ることができたので、見聞を広めることで実際に現地について多くのことを知ることができたことが、私が得た大きな成果の一つだと思えました。</p> <p>さらに、私が得た成果は、実際にアメリカで生活することによって日本との違いを知ったり、再認識できたことです。私が現地の人たちと話をしている時に、私が少し長く考え込んだりしていると「何を考えているの?」「シャイにならないでいいよ。」と言われるときが多々ありました。日本人は長く考え込んだりしていても待ってくれますが、アメリカ人は待ってくれる人は少なかったです。それよりも日本で喋る時よりも積極的に喋っていかないと会話についていけないことが何度もありました。また、アメリカは日本よりも土地が広いので、道路の広さや家の広さ、店の建物が縦ではなく横に広がっているなどの土地が広いという利点を直に思い知ることになりました。</p> <p>最後に私が得た成果は、英語の能力の向上です。私が現地についてまだ間もない頃は、英語でなんとと言えば良いのか分からない時や相手が何と言っているのか分からない時や聞き取れない時が多々ありました。しかし、周りが英語しか喋らない環境だったため次第に聞き取れ始めたり、何と言っているのか分かるようになりました。さらに、様々な場所に出かけてその店員の方や一般人の方とお話することによって日常会話や自分の伝えたいことを話せるようになったので、英語の能力が向上したと思えます。</p> <p>今回の海外研修で、鹿児島とサンディエゴの地理的要因から建物の建て方や生活の違いなどが分かったが、公共交通機関の乗り物に乗った際は、鹿児島では日本語と英語と中国語と韓国語のアナウンスが流れるので観光者に対して親切だが、サンディエゴでは英語とスペイン語のアナウンスが流れていたのであまりアジア人の観光者に対しては親切ではないという双方の違いを気づける能力を得たと思えます。</p>		
〔研修後の抱負〕		
<p>まずは、研修先で友達になった人たちとこれからも連絡を取り合うことで今後も良い関係を築いていきたいと思えます。さらに、研修で得た経験や英語の能力を自分の研究に還元したり、大学の友人たちに共有していきたいと思えます。そして、今回の研修で得られた成果や経験を就職活動や就職後の仕事など今後の人生に対して有効に役立てていけるように頑張りたいと思えます。</p> <p>また、今回の海外研修でサンディエゴの人たちがサンディエゴのロゴが描かれているTシャツ着たり、様々なイベントをサンディエゴと絡めて開催していたため、彼らの地元愛を強さを感じることができました。私は鹿児島出身なので、鹿児島の自然の豊かさを伝えると同時に人が行う様々な伝統行事や県・町や企業が催す様々なイベントに参加することで鹿児島の魅力を県内外の人々に伝えていきたいと思えます。</p>		

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・2年

氏 名: 森 美詠

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修	
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国・カリフォルニア州 サンディエゴ	
研修期間	平成30年6月23日	平成30年9月10日
〔研修を通じて得た成果〕		
<p>本研修を通して、英語によるコミュニケーションスキルを向上させることができました。これは留学に行かなければ、11週間で身につけることはできないレベルだと感じています。具体的には、聞き取りの力が特に向上したように感じました。1日中英語を使って生活をして、耳が少しずつ慣れていく感覚を覚えました。それに加えて、語学学校や友達との会話の中で、正確な発音を学び、日常会話内での表現を増やすことができました。この成長の過程で、自分が口から出せるようになった音は、聞き取ることもできるようになるということに気付きました。次に、現状を前向きに捉えることが、留学前よりも得意になったように感じます。サンディエゴの人々は、大変明るく人生を大いに楽しんでいるように感じられました。いろんな友達から“Life is short!”と言われました。この経験から、いろいろと考えて不安になる前に、とにかく積極的にやってみようようになりました。またいつでも楽しむ気持ちを忘れないように活動することができるようになりました。そして、今回の研修を通じて得た成果の中で最も大きなものは、視野が広がったことです。つまり自然科学以外の学問に興味を湧いたことです。アメリカで11週間生活してみて、日本とはあまりにも違いすぎる物事を目にして、理由を考えているうちに人間が作り出した社会の仕組みを学んでみたいと感じるようになりました。今まで、私の学問的な興味は自然科学に偏っていました。しかしアメリカではホームレスが多いこと、アメリカは日本よりも貧富の差が大きいこと、人種差別は大変深い問題であることなどから、政治学や経済学や社会学といったものに強い興味を抱きました。これらはもし留学しなければ気付かなかったことであり、また私の視野・興味は広がらなかったと思います。将来、理系人材としてもものづくりの仕事をするなかで、世界の状況を読むことは重要なことであり、そのためには政治学、経済学や社会学といった学問の知識も少なからず必要であると考えられます。地域貢献活動のテーマとして「日米の工学部に在籍する女子学生の割合」を掲げ、サイエンスセンターでボランティアをおこないながら、入手した統計をもとに違いや共通点を発見しました。女子学生の割合が工学部において少ないことは共通していましたが、サンディエゴ州立大学では土木系の学科が鹿児島大学より女子学生の割合が高い結果となりました。これを受けてアメリカ在住の男女にアンケートを取り、さまざまな意見を知ることができました。このように私の海外研修は大変有意義なものでした。</p>		
〔研修後の抱負〕		
<p>この研修をきっかけにして、今後は英語をより一層上達させたいと考えています。修士1年であれば1年使ってもう一度留学したいところですが、2年でありかつ企業から内定をいただけるので、仕事をしながら英語力を磨いていこうと思います。内定先の企業は、グローバルに活動しているので、海外出張や駐在をさせてもらえるように、事あるごとに積極的にアピールしていきたいです。また研修では、日本にはなかなかいないタイプの人との出会いが大変刺激的であったため、今後も新しい価値観と出会えるチャンスをうかがっていきます。また、地域貢献活動で得た工学部の女子学生の割合に関する知見をもとに、これから大学進学を考えている女子に工学部へ興味をもってもらえるような活動ができればいいなと考えています。</p>		

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科・1年

氏 名: 宇野 友理

授業科目名	理工系国際コミュニケーション海外研修
研修先(国・地域) 滞在地	オーストラリア連邦・西オーストラリア州 パース
研修期間	平成30年7月12日 ~ 平成30年9月26日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修での一番の成果は、自身のアカデミックキャリアの柱となる研究テーマと、それに関係する研究者との繋がりを得られたことである。近年、人工知能を応用した技術が目覚ましく発展を遂げ社会を豊かにしているが、その人工知能の要となっている概念が機械学習である。天文学も例外ではなく、機械学習を応用した研究が注目を集め始めている。鹿児島大学はVERAという日本に4つある超長基線電波望遠鏡のひとつを運営しており、昼夜問わず毎日熱心に観測が行われている。通常データは解析ソフトを使って電波の強度やガスの分布を調べる。これを全て人の手でマニュアルで行うと大変時間が掛かる。そこで、機械学習を使ってそれらの作業を自動化し、時間短縮をして効率よく研究をしたい。研修地のICRARは完成すれば世界一大きな電波望遠鏡になるSKAというプロジェクトを抱える主要機関のひとつである。SKAは膨大な量のデータを生み出すので、データ処理を如何に効率的に行うかは重要な研究テーマであり、現地で私の指導に当たったチェン先生はその問題解決に携わっている。彼から私が研究に与えられたテーマは機械学習による電波源の判別と、その結果を要素とピークの数によって自動的に分類するモデルの汎用性の評価であったが、私はこの研究を発展させることで、将来、自分で得た観測データを解析する手段として使うことができると確信している。また、興味のある研究を行っている研究者へのアプローチも積極的に行い、今後の研究のための土台作りもした。ICARAは世界で5番目に位置する電波天文学の研究機関である。そのため世界各国から優秀な学生が集まり、議論の場がたくさん設けられていた。彼らと短期間でも生活を共にするのは大変刺激的であり、自分が研究者として結果を残すためにはどう今を過ごすべきかを痛切に考えさせられた。地域貢献活動としては、日本領事館でのJET歓迎レセプションを始め、UWAで毎週水曜日に行われる豪・日会話クラス、パース兵庫文化交流センターでの交流会、ナショナルサイエンスウィークの星空観測会、そしてパースサイエンスフェスティバルに参加した。そこで実感したことは、市民が積極的にいろいろな文化を享受しようと強く意識していることである。どのイベントに参加しても、そこにはたくさんの方が居て、彼らの知ろうとする目が印象的であった。パース市の特色は、市が全体となって市民の生活向上に直接的に働きかけていることがある。例えば、市の周辺から中心部へ続く道には、公園が隣接していたり、ランニングコースが設けられ、自由に使えるトレーニングマシンや自転車の修理場所が所々に設置されていた。その為週末にはたくさんのスポーツを楽しむ人々を見受けられた。このような違いに注目することは、鹿児島市の活性化に繋がるだろう。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修を通して自分が必要と感じたことは2つある。ひとつに、自分の研究を周りに発信する能力を身に着けることである。その為には、基礎的学力はもちろん、英語で分かりやすく説明する力を磨かなければならない。次に、ICRARで得た習慣を鹿児島大学に導入することである。たとえば、ICRARでは毎日のようにミーティングがあり、たくさんの学生や研究者と顔を合わせ、議論する場が頻繁に設けられている。特に、学生同士が集まってプロットを見せ合うミーティングでは、他の学生がどのような研究をしているのかを知れると同時に自分のプレゼン力を磨く良い機会にもなり、研究力の向上が期待できる。このような仕組みを鹿児島大学でも始めてみようと考えている。</p>	